

令和元年度

事業報告書

自 平成 31 年 4 月 1 日

至 令和 2 年 3 月 31 日

公益財団法人 大山健康財団

公益財団法人 大山健康財団
令和元年度事業報告書

〔 自 平成 3 1 年 4 月 1 日
至 令和 2 年 3 月 3 1 日 〕

本財団の令和元年度の事業は、令和元年度事業計画書に基づき、下記の事業等を行った。

I. 学術研究助成事業

本財団定款第 4 条第 1 項第 1 号に規定される学術研究助成事業は、大学、研究所、病院などにおいて、感染症の基礎的あるいは臨床的研究を行っている者及び感染症に関する疫学的研究を行っている個人で、満 50 歳以下の者を対象とする研究助成金で、令和元年度（第 46 回）学術研究助成事業は次の日程により実施した。受贈者は下記のとおりである。

なお、贈呈式は、令和 2 年 3 月 19 日（木）に霞ヶ関東海倶楽部において開催する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念から中止とさせていただいた。

- ・ 公 募 開 始：令和元年 10 月 1 日 応募要領・申請書 195 通発送

本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同サイト、日本感染症学会、日本寄生虫学会のホームページに応募要項を掲載した。

- ・ 公 募 締 切：令和元年 11 月 30 日 応募件数：70 件

（応募内訳 細菌学 55、寄生虫 15、その他 0）

- ・ 選考委員会：令和 2 年 1 月 20 日

- ・ 理事会決定：令和 2 年 2 月 18 日

【第 4 6 回学術研究助成金受贈者】（敬称略）

氏 名	所 属・役 職	研 究 課 題	助成額 (円)	選考分野
いずみだ まい 泉田 真生	長崎大学熱帯医学研究所 臨床感染症学分野/医歯薬 学総合大学院 生命医科学 領域 助教	フィリピンの呼吸器ジフテリア感染症における重症化関連因子の包括的探索～菌体側、宿主側、臨床側の観点から～	1 0 0 万	細菌学
こばやし のぶひで 小林 伸英	金沢大学医薬保健研究域 医学系 助教	ボツリヌス菌が産生する膜小胞の病態生理学的意義の解明	1 0 0 万	細菌学
すがぬま けいすけ 菅沼 啓輔	帯広畜産大学 グローバルアグロメディ シン研究センター 原虫病研究センター 助教	ニトロフラントイン誘導体のアフリカトリパノソーマ症新規治療薬としての薬効評価及び作用機序の解析	1 0 0 万	寄生虫学
たかぎ ゆう こ 高木 悠友子	国立研究開発法人 産業技術総合研究所バイ オメディカル研究部門 研究員	ドロップレットの微小環境を利用したクルーズトリパノゾーマの培養手法ならびにアッセイ系の開発	1 0 0 万	寄生虫学

つじ げんいちろう 辻 巖一郎	国立医薬品食品衛生研究所 有機化学部 主任研究官	アミン骨格を有する CDN 誘導 体を利用した新規バイオフィ ルム形成阻害剤の開発	100万	細菌学
とのむら しゅういち 殿村 修一	国立研究開発法人 国立循環器病研究センター 脳神経内科 医師	ケニア・ナイジェリアにおけ る蝕原性細菌と生体防御機構 の解明による脳卒中低減の取 り組み	100万	細菌学
はら ひでき 原 英樹	慶應義塾大学医学部 微生物学免疫学 特任准教授	発展途上国で流行する細胞内 寄生菌の炎症応答を利用した 生体内増殖機序の解明	100万	細菌学
みなと ゆうすけ 港 雄介	藤田医科大学医学部 微生物学講座 講師	難治性非結核性抗酸菌症に対 する抗菌薬効果増強剤の開発	100万	細菌学
もり みほこ 森 美穂子	北里大学北里生命科学研 究所大学院 感染制御科学府 微生物応用化学研究室 助教	アcantアメーバ角膜炎治療 薬シーズの探索～安心してコ ンタクトレンズを使用できる ように～	100万	寄生虫学
よしだ みつり 吉田 光範	国立感染症研究所ハンセ ン病研究センター 感染制御部 主任研究官	コートジボワール共和国にお けるシングルセル・ゲノミク スを駆使したブルーリ潰瘍の 伝播・感染経路推定	100万	細菌学
			1,000万	

II. 顕彰事業

本財団の定款第4条第1項第2号及び大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞選考規程第2条に基づき、令和元年度顕彰事業は下記の日程で実施し、審議の結果大山健康財団賞に狩野繁之氏、大山激励賞に名知仁子氏、竹内勤記念国際賞に高橋匡慶氏をそれぞれ受賞者に決定した。

なお、贈呈式は令和2年3月19日(木)に霞ヶ関東海倶楽部において開催する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念から中止とさせていただいた。

各受賞者には、それぞれ個別に下記の賞状等をお送りした。

- ・大山健康財団賞受賞者：賞状・記念メダル・副賞 100万円
- ・大山激励賞受賞者：賞状・副賞 50万円
- ・竹内勤記念国際賞受賞者：賞状・副賞 30万円

- ・公募開始：令和元年10月1日 推薦依頼 44通発送

本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同サイトに推薦依頼を掲載した。

- ・公募締切：令和元年11月30日

※推薦件数：大山健康財団賞：4件、大山激励賞：4件、竹内勤記念国際賞：1件

- ・選考委員会：令和元年12月24日
- ・理事会決定：令和2年2月18日

1. 令和元年度（第46回）大山健康財団賞受賞者（敬称略）

○狩野繁之^{かのうしげゆき} 国立研究開発法人 国立国際医療研究センター（NCGM）研究所
熱帯医学・マラリア研究部 部長
医師 医学博士 満 60 歳

<功労の内容>

狩野繁之氏は、国立国際医療研究センター（NCGM）の研究者として、アジア太平洋地域の発展途上の国々で、長年マラリア対策の医療協力を尽力されている。

特に、1998年、橋本龍太郎首相が「国際寄生虫対策」をG8サミットで提唱された、いわゆる「橋本イニシアチブ」を受け、竹内勤慶應義塾大学医学部教授と共にそのプロジェクトをタイ・マヒドン大学で立ち上げられ、学校保健を基盤としたマラリア対策に5年間にわたりJICA短期専門家として関与され着実な成果をあげられた。

その後も、マヒドン大学熱帯医学部（FTMMU）とのマラリア対策に関わる共同研究を続けられ、NCGMとFTMMUの包括的共同研究協定（MoU）締結の成果を上げられて、橋本元総理が2003年に授与されて以来の「名誉博士号（熱帯医学）」を2018年に授与された。

また、同年、フィリピン大学とNCGMでMoUを締結されたほか、ラオス国立パスツール研究所だけでなく世界パスツール研究ネットワークとのMoU締結も先導され、広く世界の発展途上国のマラリア対策に資する研究基盤を形成された。

2. 令和元年度大山激励賞受賞者（敬称略）

○名知 仁子^{なち さとこ} 特定非営利活動法人 ミャンマー ファミリー・クリニックと菜園の会
（MFCG） 代表理事
医師 満 57 歳

<功労の内容>

名知仁子氏は、ミャンマー連邦共和国の無医村で巡回診療を行う傍ら、自らNPOを設立され、医療・菜園を通じ保健衛生・栄養などを学ぶ機会を提供し、住民自身が生活環境の課題を解決し、命を育む未来を描ける社会の実現に向けて多大な貢献をされている。

活動地域であるタウンミヤは、西南部のデルタ地帯・エーヤワディ地方区の一地域で無医村が多くあり、病に苦しみながらも貧しさから病院へ行けない人たちも多く、この問題を解決するためには、医療だけではなく、コミュニティの健康を目指す活動が不可欠となることを名知氏は認識された。

ミャンマーの人たちと同じ目線に立ち、彼らの問題を一緒に考えながら目標の実現に向けて具体的に3つの活動、即ち「巡回診療」、「保健衛生指導」、「家庭菜園支援」を展開し定着するよう尽力されている。

3. 令和元年度（第2回）竹内勤記念国際賞受賞者（敬称略）

○高橋 匡慶^{たかはし まさよし} キヤノンメディカルシステムズ株式会社
分子検査ソリューション事業推進部
グループ長 満 47 歳

<功労の内容>

高橋匡慶氏は、東芝研究開発センター入社以来、独自技術のDNAチップを用いた遺伝子検査システムの研究開発に従事してこられた。

2015年、西アフリカでのエボラ出血熱のアウトブレイク時には、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）の研究班に参加し、蛍光 LAMP 法（Loop-Mediated Isothermal Amplification）による迅速検査システムを開発され、我が国の緊急支援の一環としてギニア共和国にこのシステムを供与し、技術指導を行われた。

また、2016年にブラジルでのジカ熱の流行が世界的問題になった折、蛍光 LAMP 法による迅速検査システムの開発に着手された際、高橋氏が中核となって開発に取り組み、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）の承認を取得し、社会実装を実現された。

本研究の臨床性能試験は、故竹内勤慶應義塾大学医学部教授等が30年以上にわたり支援しつくりあげてきたブラジルの LIKA 研究所で実施されたもので、現在も同研究所と研究協力を継続され、日伯連携感染症の偉業、研究資産を引き継ぎ発展させている。

Ⅲ. 学術集会支援事業

本財団定款第4条第1項第3号に基づき、平成31年4月1日から4月30日の期間で本財団のホームページに募集要項を掲載し募集を行なった結果、3件の応募があり、令和元年5月16日開催の学術集会支援審査委員会及び同日開催の理事会において、下記の事業に支援することを決定した。

1. 日仏セミナー「これからの微生物学」に30万円助成した。日本パスツール財団より以下の報告があった。

- ・申請者：渡辺昌俊（一般財団法人 日本パスツール財団 代表理事）
- ・主催者：国立国際医療研究センター及び一般財団法人 日本パスツール財団
- ・開催責任者：大曲貴夫
- ・開催期間：①2019年11月12日（火）14時～17時50分
②2019年11月13日（水）14時30分～16時50分
- ・開催場所：①国立国際医療研究センター 研修棟 大会議室（東京都新宿区戸山1-2-1-1）
②山陽新聞事業社 さん太ホール（岡山市北区柳町2-1-1）
- ・参加者数：①60名 ②120名
- ・申請金額：50万円（総予算額：200万円）

【開催概要・成果】

パスツール研究所特別クラス教授のパスカル・コサール博士の基調講演と国内の第一線の医学分野の研究者によるパネルディスカッション『薬剤耐性（AMR）克服のための世界連携』を行い最先端の医学研究情報を共有した。

【事業の成果】

東京は若手研究者を中心に60余名、岡山は一般聴衆を中心に120名の参加者を集め、岡山セミナー開催記事が翌朝の山陽新聞に掲載された。

【収支状況】

- ・収入 寄附金 1,221,901円、助成金 1,500,000円（内、大山健康財団 300,000円）
参加費 28,500円、自己資金 198,161円 計 2,948,562円
- ・支出 渡航旅費 840,185円、国内移動費 272,918円、会場費 355,990円、その他 1,479,469円
計 2,948,562円

2. 第25回日本ヘリコバクター学会学術集会に30万円助成した。同学会から以下の報告があった。

- ・申請者：菊地正悟（愛知医科大学医学部公衆衛生学講座 教授）
- ・主催者：日本ヘリコバクター学会
- ・開催責任者：菊地正悟
- ・開催期間：2019年6月21日(金)～6月23日(日)
- ・開催場所：名古屋市・ウインクあいち
- ・参加者数：1,300名
- ・申請金額：50万円（総予算額：2,700万円）

【開催概要・成果】

- ・学会全体として：ピロリ菌に関するこれまでの研究成果をどのようにわが国の胃がん対策に生かして胃がんおよび胃がん死の激減を図るかを中心に、「学会四半世紀—研究から対策へ」というテーマで開催された。会員に、研究成果を対策に生かすことの重要性を再認識してもらう機会になったと思う。
- ・講演：国内から1つ、海外から4つの講演があった。ピロリ菌の主な感染経路が家族内感染なので、「パラサイト・シングル」や「婚活」の造語で有名な中央大学の山田昌弘教授（社会学）による、わが国の婚活や育児の将来像に関する特別講演があった。海外からは招待講演では、中国の Jianzhong Zhang 教授による中国のピロリ菌の現状、韓国の Il Ju Choi 教授による韓国の胃がん対策の現状、米国の David Y. Graham 教授によるわが国のピロリ菌対策の批判的吟味に加え、米国の Hoda Malaty 教授によるブータンでのピロリ菌・胃がん対策の現状に関する講演が行われた。各演者とも質問を受けていただいたので、活発な議論も行われた。
- ・主題演題：シンポジウム1の「成人のピロリ菌感染者の胃がん死をどう防ぐか」では、内視鏡検査や血清検査などによる胃がん高リスク者の絞り込みが重要であることが確認され、胃がんリスク判定を目的とした血清ピロリ菌抗体キットの開発や、胃がん低リスクであるかどうかの判定に用いる血清ペプシノゲン値の基準の見直しの必要性が指摘された。シンポジウム2の「若年者 *H. pylori* 対策の未来」では、患者さん団体の代表者など専門家以外の意見も求めながら、小児に対する保険適用の拡大を図ることや、自治体などが中高生を対象に検査と除菌を行う場合の最低限守るべき事項を明らかにする必要があることなどが確認された。また、「問題となっている胃に感染するピロリ菌以外のヘリコバクター属細菌の基礎・臨床研究」、「ヘリコバクター属に関する基礎研究」、「高齢者のピロリ菌除菌」、「ピロリ菌の完全除菌への課題」、「ピロリ菌感染の内視鏡所見」、「ピロリ菌除菌後長時間経って発生する胃がん」など学術総会で継続的に議論されてきている話題に関しても活発な議論が交わされた。
- ・一般演題：ポスター発表として医療費に関する事項など、主題演題でとりあげられなかったテーマなどについて11のセッションで発表があり、活発な意見が交わされた。
- ・市民公開講座：私達の、また次の世代が胃がんで苦しまないようにするために今何をすべきかについて、小児科学、消化管内科学の専門家がわかりやすい内容の講演を行い、質問も多く出された。

【会計報告】

- ・収入の部 ①助成金 300,000円 ②学会資金より充当 19,000円 合計 319,000円
- ・支出の部 ①Hoda Malaty 教授 交通費 319,000円

3. 第 60 回日本熱帯医学会大会に 40 万円助成した。同実行委員会より以下の報告があった。

- ・申請者：山城 哲（琉球大学大学院医学研究科 細菌学講座 教授）
- ・主催者：第 60 回日本熱帯医学会大会実行委員会
- ・開催責任者：山城 哲
- ・開催期間：2019 年 11 月 8 日(金)、9 日(土)、10 日(日)
- ・開催場所：沖縄コンベンションセンター
- ・参加者数：約 466 名（招待講演者 1 人、主催者側参加者 31 人、一般参加者 434 人）

【開催概要・成果】

第 60 回日本熱帯医学会大会のテーマとして「一歩先への熱帯医学：フィールド、ベンチ、イン・シリコ」を挙げ、主に途上国における臨床研究、熱帯医学や感染症に係る基礎研究、ビッグデータや AI 等を用いた解析研究に焦点をあてた。その結果、基調講演 1 演題、受賞講演 5 演題、シンポジウム 13 演題、ワークショップ 32 演題、ポスター発表 89 演題、学生集会 4 演題、ランチョンセミナー 3 演題、サテライト企画レプトスピラシンポジウム 9 演題、サテライト企画市民公開講座 3 演題の合計 159 演題が発表され活発な討議が行われた。基調講演は、Heidelberg Institute of Global Health の Professor Olaf Muller を招き、“Challenges for malaria control and elimination in the 21st century:A view from Germany” の演題でなされた。各賞は、熱帯医学会賞、相川正道賞、研究奨励賞、女性賞が合計 5 人に授与された。

演題発表および関連する質疑応答を通じて、熱帯地における臨床研究や多地点疫学研究の在り方、熱帯特有の感染症起炎微生物の病態解明に代表される基礎研究、熱帯医学における大型コンピュータや人工知能、ネットワークデバイス等に関する知見が広まり、共同研究等の機運が涵養された。参加者より大変有意義な大会であったとの感想が多く寄せられた。

【収支状況】

- ・収入の部 ①参加費 2,627,000 円 ②共催費セミナー関係費 594,000 円 ③広告関係費 540,000 円 ④商業展示関係費 98,600 円 ⑤寄附金 1,671,438 円 ⑥その他収入 2,503,006 円
合計 8,034,044 円
- ・支出の部 ①事務局運営費 1,914,147 円 ②当日運営費 5,474,198 円 ③業務委託費 230,001 円 ④事後処理費 11,997 円 小計 7,630,343 円 消費税 10%72,301 円 消費税 8%331,400 円
合計 8,034,044 円

IV. 年報作成

2019 年版（年報No.44）として、平成 30 年度学術研究助成金受贈者、大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞受賞者及び平成 30 年度贈呈式アルバム並びに平成 29 年度第 44 回学術研究助成金受贈者の研究業績報告を掲載し作成した。（令和元年 12 月発行）

V. 「大山健康財団 45 年のあゆみ」の刊行

大山健康財団を紹介する冊子として、「大山健康財団 40 年のあゆみ」を 2015 年 3 月に刊行したが、在庫も残り僅かとなったことと、令和元年 8 月 8 日に大山健康財団が創立 45 周年を迎えたことから「大山健康財団 45 年のあゆみ」を刊行した。（令和元年 12 月発行）

VI. 寄附金

国際医学研究会（慶應義塾大学医学部学生組織）の第 4 2 次派遣団に寄附金 30 万円を供与した。同研究会より下記の報告があった。

- ・派遣期間：令和元年 7 月 13 日～8 月 25 日（44 日間）

- ・令和元年度訪問国：ブラジル連邦共和国、チリ共和国、アルゼンチン共和国
- ・団 長：中原 仁先生 慶應義塾大学医学部神経内科 教授

【活動内容】

本年度の第 42 次派遣団は、本研究会の設立趣旨である『医の原点の実体験』、『医学、医療を通じた国際交流』及び第 9 次 5 ヶ年計画である「変わりゆく社会に即した医療の考察」を掲げ活動を行った。

本研究会は、創設以来活動地域をブラジルから徐々にアフリカや欧州へと広げ、数々の実績を重ねてきた。ブラジル国内で過去派遣団の活動を継続・発展させ、現地還元の可能性を探求すると同時に、本年度は専門医の都市部集中など日本と同じ問題を抱えるチリ共和国にて遠隔医療の現状を調査した。以下、本年度の活動目標とその具体的な活動内容を記す。

1. 「医の原点」の実体験

- ・ブラジルには日本とは全く異なる状況下で限られた医療資源を最大限に有効活用しようとする懸命に取り組まれている医療が存在する。このような医療を実体験することで医の原点について考えを深め、医師としての素質を養うことを目標として活動した。
- ・アマゾナス州マナウスにおいて、アマゾン河流域の無医村をめぐる保健局巡回診療船に同乗し、プライマリケアを実施した。
- ・マツグロソドスル州ドウラードスを訪れ、そこで生活をする先住民族の村を訪問し、NGO 団体 Associação Médicos da Floresta の一員として眼科検診に参加した。

2. 医学、医療を通じた国際交流

近年、国際医療交流の活発化は目覚ましく、医療交流の必要性もより一層増加すると考えられる。それに伴い、医療従事者にもますます国際的な視野を持つことが求められている。私どもは本研究会の活動を通じて現地医療従事者との交流を深め、自らのコミュニケーション能力を養うと同時に、現地大学医学部をはじめとする各団体との医療交流の更なる発展に努めた。

- ・現地大学医学部や医療施設を訪問し、実習を行った。
- ・サンパウロ大学とパウリスタ大学にて「第 32 回日伯医学生会議」を開催し、ポルトガル語で医学的話題について発表・討論を行った。
- ・サンパウロ大学にて団長が日本における最新の医学的知見を講演し、現地医療従事者と討論を行った。
- ・世界を舞台に活躍されている三田会の先輩方を訪問した。
- ・アマゾナス連邦大学病院にて日本人のブラジルの医療への貢献について発表を行った。

3. 変わりゆく社会に即した医療の考察

2025 年の日本では、団塊の世代が後期高齢者とされる 75 歳以上に到達するため、介護・医療費などの社会保障費の急増が懸念されており、現在の医療福祉制度における重要な課題として 2025 年問題と称されている。急速な高齢化に応じて医師が求められる医療は変化し、慢性疾患や変性疾患への需要が高まることが予想される。この需要を解消する 1 つの方法として遠隔医療がある。そして昨今、遠隔医療に積極的に取り組んでいる国の 1 つがチリ共和国である。チリは、山岳地帯が多く地理的に医療アクセスの乏しい地域が存在することや、近年高齢化が進みつつあることなどから遠隔医療の必要性が増している。

第 42 次派遣団は、チリ共和国で遠隔医療がいかに機能しているのかを学ぶことで「時代に即した理想の医療」を考察した。また、ブラジルやチリの医療保険制度を理解することで、日本の保険制度の在り方を考察した。

- ・マツグロソ州の遠隔医療の取り組みについて調査した。
- ・チリの公立病院と私立病院を視察し比較することで、日本と異なる医療保険制度の下で成り立つ医療を理解した。
- ・チリの遠隔医療を提供する会社と、それを用いてプライマリケアを行う病院を見学した。
- ・地方の病院で脳卒中の対応に関して専門医に D to D の遠隔相談を行う様子を見学した。

Ⅶ. 贈呈式及び祝賀会

令和元年度の学術研究助成金並びに大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞の贈呈式・祝賀会は、令和2年3月19日に霞ヶ関東海倶楽部にて開催の予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念から中止とさせていただいた。

Ⅷ. 総務事項

『理事会』（令和元年度）（敬称略）

◇第21回理事会

（令和元年5月16日）理事総数6名 出席者：理事5名 監事2名

1. 「平成30年度事業報告書（案）」の承認
2. 「平成30年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 「2019年度学術集会支援助成金の贈呈対象学術集会」の決定
4. 「2019年度～2020年度理事候補者」の推薦
5. 「2019年度～2022年度監事候補者」の推薦
6. 「2019年度～2020年度評議員補充候補者」の推薦
7. 「2019年度～2020年度顕彰者選考委員」の選任
8. 「2019年度～2020年度学術研究助成金選考委員」の選任
9. 「第16回評議員会（定時評議員会）の日時及び場所並びに議事に付すべき事項」の承認
10. 執行理事（神谷茂理事長、中里博常務理事）の職務執行状況報告

◇第22回理事会

（令和元年6月6日）理事総数7名 出席者 理事6名 監事2名

1. 「2019年度～2020年度代表理事（理事長）」の選定
※代表理事（理事長）に神谷 茂理事を選定
2. 「2019年度～2020年度執行理事（専務理事、常務理事）」の選定
※専務理事に遠藤弘良理事、常務理事に中里 博理事を選定

◇第23回理事会

（令和2年2月18日）理事総数7名 出席者 理事6名 監事2名

1. 第46回学術研究助成金受贈者の決定
 2. 第46回大山健康財団賞、令和元年度大山激励賞及び第2回竹内勤記念国際賞受賞者の決定
 3. 令和2年度事業計画書（案）の承認
 4. 令和2年度正味財産増減予算書（案）の承認
 5. 第17回評議員会の日時及び場所並びに議事に付すべき事項の承認
 6. 執行理事（神谷茂理事長、遠藤弘良専務理事、中里博常務理事）の職務執行状況報告
- 『評議員会』（令和元年度）（敬称略）

◇第16回評議員会（定時評議員会）

（令和元年6月6日）評議員総数8名 出席者：評議員8名 理事5名 監事2名

1. 「平成30年度事業報告書（案）」の承認
2. 「平成30年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 「2019年度～2020年度理事」の選任
4. 「2019年度～2022年度監事」の選任
5. 「2019年度～2020年度評議員補充」の選任

※新評議員に佐藤昭男氏、竹内礼子氏を選任、影島一吉氏は評議員を辞任（→理事に就任）

6. 執行理事（神谷茂理事長、中里博常務理事）の職務執行状況報告

◇第17回評議員会（書面表決）

（令和2年3月19日） 評議員総数9名

1. 令和2年度事業計画書（案）の承認
2. 令和2年度正味財産増減予算書（案）の承認

IX. 内閣府関係

『定期提出書類等』（電子申請）

1. 事業報告等の提出

- ・平成30年度の事業報告書及び決算報告書の提出（電子申請による関連報告を含む）

提出：令和元年6月29日、修正：令和元年8月23日、令和元年8月29日、審査：令和元年8月29日、完了：令和元年12月27日

2. 変更の届出

- ・欠員に伴う評議員選任に伴う変更の届出：令和元年7月4日 完了：令和元年9月6日

※新任評議員：佐藤昭男、竹内礼子（令和元年6月6日就任、令和元年6月27日登記）
任期：令和元年度～令和2年度

- ・任期満了に伴う理事・監事の選任に伴う変更の届出：令和元年7月4日

※新任理事：影島一吉 退任理事：脇山好晴（令和元年6月27日登記）

3. 事業計画書等の提出

- ・令和2年度の事業計画書及び正味財産増減予算書の提出

提出：令和2年3月31日 完了：令和2年3月31日

以上

[附属明細書]

令和元年度事業報告書には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。

令和2年4月

公益財団法人 大山健康財団